

31「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。32そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、33羊を右に、山羊を左に置く。

バチカンの大聖堂にミケランジェロが描いた「最後の審判」という絵画があります。この画が描かれた根拠となる聖書はヨハネの黙示録が知られていますが、今日のマタイによる福音書も審判について記していますね。

この画の真ん中にキリストがいます。全部で400人以上のひとたちを描かれています。左下にいる死者が復活してキリストのもとに挙げられて、自分の右にいるひとたちを天国にあげ、左にいるひとたちを地獄に落とされているのだという解説があります。しかし、どうもそう単純ではないようにみえます。キリストの周りにいるひとたちは右にいるひとたちも左にいるひとたちもあかなく描かれています。画の右下に目をやると死者の魂を裁く地獄の裁判官に近頃は地獄に落とされていくようです。(この画を観ながら、わたしはどこにいるのだろうかと自分が描かれる場所を探してしまい気になるのですが、意識過剰にされそうです。)

つまりミケランジェロは、聖書箇所31節、「人の子は、栄光に輝いて天使たちをみな従えて来る時…」の人の子はキリストであるが、34節のひとびとに祝福される人たちと呪

われるひとたちを裁く王は別の存在だと理解しているのです。それでは、この王はだれでしょう。解説によればギリシア神話の地獄の王ミノスであるといわれます。その地獄の王の左に死者を冥界においやるカロンという、やはりギリシア神話の守が描かれています。以上をまとめると、この画にはキリスト教世界とギリシア神話の世界が同時に描かれていることとなります。

さらに、たとえ全体を左右する言葉があります。32節の「すべての国の民」です。これは「民族」と訳す方がふさわしいでしょう。

要約すると、福音書の時代に、キリスト教会の中にいたユダヤ人たちとギリシア人と呼ばれた地中海地方のいろんな異国の民族です。ユダヤ人は、ユダヤ教から律法を受け継ぎ、キリストを救い主と信じる際にとまどいがありました。ギリシア人はそれぞれの神々を崇拜していた過去がありました。そういうひとたちのだれもみな、ユダヤ人ならば律法として理解できる戒めを、ギリシア人ならかつての神話の世界観に基づいて受け入れるべき戒めが、ここに書き記されています。それは、飢えている人たち、喉が渇く人たち、行く当てのない人たち、衣食に事欠き、病を患い、囚われの身になっている人たちとの関わりの問題なのです。

34そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。35お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、36裸のときに着せ、病気のときに見舞

い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』37すると、正しい人たちが王に答える。『王よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。38いつ、旅しておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。39いつ、病気をなざしたり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』40そこで、王は答える。『はつきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

先月、10月の24日(土)に川崎戸手教会ヨルダン寮の除却記念礼拝が行われました。そもそもこのヨルダン寮という建物は多摩川の河川敷、国有地に建てられた民家だったのです。多摩川沿いの河川敷に戦後行き場のない人たちが、それは在日コリアン、日本人がバラックを建てて住みはじめ、いつやら水道を引き、電気を引き、街ができていったのです。そこに身を寄せたひとりが先の戦時下に朝鮮で船で仕事をしていた金萬守さんでした。植民地時代の朝鮮でしたから、船ごと日本に没収されて長崎に連れてこられました。その後、川崎に流れ着いたのでした。この金萬守さんと結婚された李有彩さんが、その息子、金カンスプを関田寛雄牧師と政枝先生が自宅を開放し営んでいた保育園に入れたことからつながりがはじまりました。

金萬守さんから、その自宅を買い入れて、これを教会として河川敷に移転したのでした。それが今から35年前、1985年のことです。ちなみに、わたしが神学校に入ったのは1989年で1992年最後の学年で一年間、川崎戸

手教会にお世話になったのでした。孫牧師はわたしの2年後輩です。すでに戸手教会に通っていましたが、おなじ教会に神学生が複数通うことに躊躇いましたが、孫さんに相談し、快諾してくれたので一年間毎週いっしょに通った次第です。彼は神学生として通い、卒業後も牧師として迎えられ現在に至っています。そうこうしているうちに川崎市の多摩川沿いの再開発計画が持ち上がり、地域の全世帯が立ち退きを言い渡されたのです。

その際、戸手教会はひとつの宣教の課題を自らに課しました。「河川敷に暮らす最後の一人と共に」です。最後の一人とはどんなひとだったのか、法的には不法占拠ですが居住権があり、建てたものには保証がついて、近隣のマンションなどに移って行かれたことはうかがっています。次第に世帯が減っていったここ数年、近くにあったトタン葺きの簡易な建物には、職を求めて日本に働きに来た外国から来た人たちが住まっています。そこから推し量るには、最後の一人とは、建物もなく、したがって何の保証も、法的な保護もなく、行き先のない人ではなかったのかもしれないと思われるのです。

孫牧師は、関田牧師によるヨルタン寮の取得を「店開き」とよびます。「とんでもないところに店を開いた」後継ぎは大倉一郎牧師でした。大倉牧師は、ヨルタン寮の宣教の基礎を据えたといえます。そこで教会が何をすべきか、そのレールを敷いたのです。そして三代目の孫牧師は「店じまい」をしたといえます。彼は「何事もその終え方が全体を総括する」といい、「もしも住民をおいて教会が先に立ち退いたなら、関田・大倉牧師のなさったことを、トブに棄てることになる」と厳しく自らを戒め、店じまいに当たって来られたの

でした。この「最後の一人と共に」という姿勢が「河川敷に暮らすひとびとの、さらには交渉相手である行政との信頼関係を育んだ」といいます。

このような働きをなした戸手教会に、わたしたちはこの一年間決して少なくない献げ物を繰り返し差しあげてきました。繰り返し送金したり封筒を差しあげたので、次第に先方の驚きが大きくなっていったことを報告さしあげます。「河川敷の最後の一人」と向き合い続けた川崎戸手教会の背後にわたしたちのように数知れない教会が繋がっています。そして、わたしたちはその「河川敷の最後の一人」を知りません。いつもは自己批判的に聖書を読みますが、今日は特別です。(次は、宿河原教会です…)話しには飛躍がありますが、あながち外れてもいません。

たとえ話をもう一度読み直して、神の国を受け継ぐ祝福されたひととは王に尋ねます。

「主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねたでしょうか。」